

# ロシア語の「性質構文」の代名詞重複についての一考察

— 文法化の観点から —

菅井 健太

キーワード：代名詞重複，性質構文，文法化

## 1. はじめに

本稿では，ロシア語の主に話し言葉に見られる「代名詞重複」<sup>1</sup>と呼ばれる現象を取り扱う。代名詞重複は，文中で主語あるいは目的語の役割を担う語が，同一文中において同一指示の人称代名詞によって再標示されるような現象を指す。ロシア語では，特に話し言葉において，(1)のように主語も，(2)のように目的語も重複されうる<sup>2</sup>。

(1) Пушкин он родился в 1799 году. (Сиротинина 2010: 129)

「プーシキンは 1799 年に誕生した。」

(2) Мороженое его все любят. (McCoy 2003: 143)

「アイスクリームはみんなが大好きなものだ。」

代名詞重複は一見余剰な現象に見える。しかし，Сиротинина (2010: 128)は，「性質構文 (качественная конструкция)」における“余剰な”代名詞は「全然余剰なものではなく，特別な意味を創出するもので，全くもって誤りではない」と指摘し，そのような構文は「全てのロシア語母語話者（方言話者も，最も教養の高い人々も）によって，話し言葉のみならず，公式な場での話し言葉や書き言葉においても用いられる」とさえ述べている (Сиротинина 2010: 98)。

これらの指摘を踏まえ，本稿では「性質構文」における代名詞重複の特殊性に着目し，まずその形態統語的，及び意味的な特徴について指摘する。そのうえで，文法化の観点から検討を行う。

---

<sup>1</sup> 「代名詞重複」という名称は，McCoy (1998, 2003)が用いている“pronoun doubling”の筆者による暫定的な訳である。厳密には，言語学で一般的に用いる「重複(reduplication)」の意味とは異なるため注意が必要である。一方で，バルカン言語学などにおいては同様の現象を「重複(reduplication)」と呼ぶことは少なくない。本稿では，ロシア語の当該現象の術語として，「代名詞重複」を暫定的に用い，また同一指示的な代名詞が共起することを“重複する”と表現する。

<sup>2</sup> 本稿では，引用した例の中では，重複を受ける名詞句とそれと同一指示の重複している代名詞は下線で示す。また，例の引用元も( )内に示す。この際，ロシア語話し言葉コーパス(SRC 2010)から引用する場合は，当該の例が含まれている文書ファイル名を示す。

本稿の構成は次の通り．2.で代名詞重複に関する先行研究を概観し、「性質構文」の代名詞重複の特徴についても整理する．3.では、「性質構文」の代名詞重複を文法化の観点から検討する．そして，4.で検討の結果をまとめ，今後の課題を示す．

## 2. ロシア語における代名詞重複(先行研究)

### 2.1. 代名詞重複とトピック化

ロシア語の代名詞重複は，文・発話のトピック化<sup>3</sup>と関係がある．例えば，Comrie (1973: 295)は，ロシア語の話し言葉に見られるはっきりとしたトピック標示の手段として「強トピック化(strong topicalization)」を挙げている(cf. also 匹田 1994)．このとき，トピックとなる名詞句は残りの文からイントネーション的に独立し，残りの文にはそのトピックの名詞句と同一指示である代名詞が存在するという．この代名詞による繰り返しこそ，代名詞重複である．また，このときトピックの名詞句は主格標示される．「強トピック化」は，ロシア語の話し言葉研究の中では「テーマの主格(именительный темы)」(cf. Попов 1964, Панова 1968, Лаптева 1966, 1976 etc.)として知られる．「テーマの主格」は，文頭のトピックを主格で標示する現象を表す<sup>4</sup>．以下に先行研究及びロシア語話し言葉コーパス<sup>5</sup>からいくつか例を挙げる．

- (3) a. Виктор, я с ним вчера говорила. (McCoy 1998: 233)  
「ヴィクトルとなら，私が昨日話した．」
- b. Та, которая здесь стояла лампа, я ее не брал. (Лаптева 1976: 144)  
「ここにあったランプなら，それは私が取った．」
- c. Она, вообще ее не возможно сдвинуть. (SRC 2010: 101224\_003)  
「それ(馬)は，まったく動かすことができない．」
- d. Захаров, он не зря снимал Шварца очень много. (SRC 2010: 101226\_002)  
「ザハロフは，無駄にシュヴァレツ(の作品)をたくさん撮影したわけじゃない．」

<sup>3</sup> 本稿では，トピックやコメントについて，一般的に受け入れられている定義にしたがう．トピックは文における話題を表し，コメントはそのトピックについて述べられている内容を表す．

<sup>4</sup> 「強トピック化」と「テーマの主格」は似た現象であるが，後者は必ずしも代名詞重複を前提としないという点で異なる．例えば，Попов (1964: 260-261)は「テーマの主格」を伴う文を，代名詞重複がある場合とない場合，及び全く同じ名詞句(あるいは同意語)による重複がある場合の3通りに分類している．その一方で，「テーマの主格」を伴う文では，同一指示の名詞句，特に代名詞が存在することが一般的であることも指摘されている．

<sup>5</sup> これは，ロシア語母語話者の対話を録音し，それを文字化した電子コーパスである．本研究で用いるのは，2010年度の調査で収集されたコーパスを用いる．調査時期は2010年12月，調査地はロシア連邦のモスクワ及びリャザンである．東京外国語大学大学院グローバルCOEについては<http://cblle.tufs.ac.jp/>を，「ロシア語話しことばコーパス」については[http://cblle.tufs.ac.jp/multilingual\\_corpus/ru/](http://cblle.tufs.ac.jp/multilingual_corpus/ru/)を参照されたい．

(3)の例はいずれも文頭にトピックの名詞句が置かれている。同一指示である残りの文において重複する代名詞の格はそれぞれ異なり、特に(3a)~(3d)は斜格であるにもかかわらず、文頭のトピックの名詞句はいずれも主格で標示されている。また、このとき、トピックの名詞句はいわば分節された要素となり、その後でははっきりとしたイントネーション上のポーズが置かれる(Попов 1964: 258, Панова 1968: 303 etc.).

さて、Comrie (1973)がロシア語の話し言葉に見られる現象として挙げた「強トピック化 (strong topicalization)は、類型論的には、「左方転位(Left Dislocation)」の一種である(cf. Gebert 2009, 菅井 2014 etc.). そのことは、左方転位に特有なくつかの特徴がみられることから確認できる。たとえば Givón (2001: 265)は、左方転位の統語・類型的な特徴として次の(4)を挙げている。

- (4) a. 節中にトピックの名詞句の前方照応的代名詞による再標示がある。
- b. トピックの名詞句の格標示は中和される。
- c. 転位された名詞句はイントネーション的に隔離される。

(4)の特徴はいずれもロシア語の代名詞重複の文に見られる特徴と同様である。すなわち、(4a)の前方照応的代名詞による再標示は代名詞重複のことを指し、(4b)の格標示の中和はトピックの名詞句の主格標示を表している。そして、(4c)のイントネーション的な隔離とは、イントネーション上の休止のことであり、(3a)~(3d)でもトピック名詞句のあとで見られ、ここではカンマで表記されている。

このように、ロシア語の代名詞重複は、文頭の名詞句をトピック化するようないわゆる左方転位の一種であり、代名詞重複を受ける名詞句は一般的にトピックとなる(cf. 菅井 2014).

## 2.2. 性質構文と代名詞重複

Сиротинина (1974)は、とりわけ話し言葉における主語の代名詞重複に焦点を当て、ロシア語に見られる代名詞重複の分類を行っており、その中で「性質構文(качественная конструкция)」を特にわけている。Сиротинина (1974: 218)によれば、「性質構文」とは、主語の恒常的な性質を表す文の特別な構造・意味的なモデルである。このような代名詞重複が見られるのは、具体的動作や一時的な性質を表す述語ではなく、恒常的な性質や特徴を表す述語が用いられている文に限られる<sup>6</sup>。次の(5a)では主語 *кошки* の恒常的な性質が、(5b)

<sup>6</sup> 性質構文における文頭の名詞句と代名詞の間には、カンマなどが用いられることがあるが(cf. Сиротинина 1974: 217), 本稿では Сиротинина (1974: 217)に従い、*Дашшу*(*тире*)を統一的に用いる。Сиротинина (1974, 2010)以外から引用した例も、性質構文の場合には同様の表記をとる。

では主語 кошки による具体的な事態が表されているものと見ることができる。Сиротинина (1974: 213)より引用する。

(5) a. Кошки – они привыкают к месту.

「猫は場所に慣れるものだ。」

b. Кошки кричат во дворе.

「猫が庭で鳴きたてている。」

次の(6)は、性質構文の代名詞重複の有無によって、意味的な違いが生み出されている例である。Сиротинина (1974: 215)によれば、代名詞重複を伴う(6a)は“法律に通じた人”と  
いうように主語 Гриша の性質を表す一方で、(6b)は主語 Гриша の職業を単に指している。

(6) a. Гриша – он юрист.

「グリーシャは、法律に通じた人だ。」

b. Гриша – юрист.

「グリーシャは、法律家だ。」

また、Сиротинина (1974: 214-216)は、述語の形容詞に恒常的な性質を表す長語尾形が頻繁に使用されること、“感情的な”述語として такой が使用されること<sup>7</sup>、またこれら述語と共起する副詞句に恒常的な性質を示唆するような副詞的な語彙 (вообще, всегда など)が頻繁に用いられることも、このタイプの代名詞重複が、主語の性質を表していることを示す根拠として挙げている。以下に Сиротинина (1974: 214-216)からいくつか例を引用する。

(7) a. Чай – он полезный.

「お茶は健康に良いものだ。」

b. Офицеры – они все такие.

「将校はみんなそんなやつらだ。」

c. Мужчины – они всегда лезут без очереди.

「男性はいつも横入りする。」

d. Жизнь – она вообще не легкая.

「人生は一般に楽なものではない。」

そして、性質構文の代名詞重複の文は、イントネーション上、平叙文と同じ特徴（主語でトーンが上がり、代名詞から徐々に下がっていく）を有しており、文頭の名詞句と代名詞の間にははっきりとしたイントネーション上のポーズは欠如するという(Сиротинина 1974: 211, 2010: 97)。 (3)で示した例はいずれもトピックの名詞句の後にイントネーション

<sup>7</sup> Сиротинина (1974: 215)は、この場合の代名詞重複は義務的とまで述べている。

上の休止が存在し、残りの文からイントネーション的に隔離されていた。それと比較すると、このようなイントネーション上の特徴は、性質構文における大きな特徴の一つである。ただし、このことが性質構文の代名詞重複がイントネーション上のポーズを持ちえないということにはならない。同様の場合であっても、トピックの名詞句はイントネーション的に隔離されうる。ただし、このときは、(3)の例と同じように、いわゆる「テーマの主格(именительный темы)」として機能しているものと解釈できる。性質構文になる資格のある述語を持つ場合であっても、トピックとして明示的に標示することは制限されないのである。ゆえに、より正確を期した言い方をすれば、性質構文の特筆すべき特徴は、イントネーション的に隔離されることなしに代名詞重複が可能ということである。

ところで、性質構文の代名詞重複は、(3)で示したような代名詞重複と同様に文頭の名詞句はトピックとなるような左方転位であるが(cf. 菅井 2014)、イントネーション上の特徴の点では、2.1.(4)で示した左方転位の特徴と合致しない。また、主語の恒常的な性質の標示を行うという点でも、一般的な左方転位の特徴からずれるものである。このような性質構文の示す異質な特徴が何に起因するものであるかについて、3.において文法化の観点から検討を行う。

### 3. 性質構文の代名詞重複の分析

#### 3.1. 形式的な特徴について

まず、性質構文の代名詞重複が持つ特徴の一つ、平叙文と同じイントネーションを持ち、文頭の名詞句と代名詞の間にはっきりとしたポーズが欠如するという点に着目したい。

文頭の名詞句と代名詞の間にはっきりとしたポーズが存在する場合には、一文中に同一指示の名詞句が二重に用いられるという余剰性は存在しない(cf. Сиротинина 1974: 208)。なぜなら、文頭で先行した位置を占めるトピックの名詞句のほうは、イントネーションによって残りの文から隔絶され、分節されているからである<sup>8</sup>。(8)を見よ。(以降、イントネーション上のポーズは必要に応じて#で表す。)

(8) Эти люди # они же на работе. (SRC 2010: 101224\_001)

「この人たちは、仕事中心なのです。」

しかし、はっきりとしたポーズが欠如しているということは、形式的な観点から言うと、文頭のトピックの名詞句は分節されたものではなく、一文の中に含まれるということになる。このとき、トピックの名詞句と同一指示の代名詞が一文中に共起することになり、(9)に見るようにこのような文は一般的に非文と判断される。

<sup>8</sup> 実際には、「テーマの主格」による代名詞重複には、文の分節(сегментация предложения)が関わっており、文頭の名詞句は残りの文には含まれないということが指摘されている(Сиротинина 1974: 208-209, Попов 1964: 258, 263)。

(9) \*Эти люди они же на работе.

他方、性質構文では、(9)のごとくはっきりとしたポーズが欠如していても問題ない。

(10) Кошки – они привыкают к месту. = (5a)

しかしこのとき、(10)では、一文の中にトピックの名詞句である кошки とそれと同一指示の代名詞である они が共起していることになる。

次に、この際に代名詞が置かれる文中での語順に注目してみると、代名詞は必ずトピックの名詞句のすぐ後ろの位置を占めることがわかる。Сиротинина (1974, 2010)は性質構文の代名詞重複の例を相当数示しているが、1例を除いて<sup>9</sup>いずれもトピックの名詞句に後続した位置を占めている(cf. 主語の重複である(5), (6), (7))。また斜格の重複の場合も(2)や以下(11)に見るように同様である。以下(11)は Сиротинина (1974: 213)からの引用である。

(11) a. Но отца – его труднее найти, чем мужа.

「でも父というものは夫よりも見つけるのが難しい。」

b. Народ – его ничем не возьмешь.

「民衆は、打ち負かすことができないものだ。」

さらに、Сиротинина (1974, 2010)以外で、ロシア語話し言葉コーパス(SRC 2010)からも、性質構文の例を、前後の文脈とともにいくつか以下に示そう。

(12) a. Дед Мороз – он синий вообще. (SRC 2010: 101224\_003)

「(ロシアの) サンタクロースは、一般に青いものだ。」

b. И вообще я считаю, что алкоголь – он портит людей. (SRC 2010: 101224\_002)

「一般に、アルコールは人をダメにしてしまうと私は思う。」

c. Вся наша психология – она вообще такая тонкая. (SRC 2010: 101224\_002)

「私たちの心理はみな、一般的にそのように微妙なものだ。」

d. Московский – он такой более растянутый. (SRC 2010: 101226\_002)

「モスクワ (のロシア) 語は、そんな風により引き伸ばされた感じ (の発音) である。」

(12a)~(12d)の例は、いずれも性質構文と考えられる例であるが、すべての場合において

<sup>9</sup> (i) Меч, ведь он острый. (Сиротинина 1974: 212)

「刀は、だって、鋭いものだから。」

この例は、文学作品から引用されたいわば書き言葉からの例である。例(i)から、助詞のような非自立語的な要素は間に入りうるということが考えうる。この点については、今後検討したい。

代名詞はトピックの名詞句のすぐ後ろの位置を占めていることがわかる。性質構文は語順の点でかなり固まっており、その表れる位置は一般的にトピックの名詞句の直後である。

### 3.2. 文法化とそのパラメーター

本稿では、文法化について、Heine & Kuteva (2005: 14)に従い、次のように定義する。すなわち、「文法化とは語彙的な形式から文法的な形式へ、文法的な形式からより高度に文法的な形式への発展のプロセス」。Heine & Kuteva (2005: 15)によれば、ある要素が文法化しているかどうかを判断するにあたって次の(13)にあるような4つのパラメーターが有益であるという(cf. also 野町 2011: 33)。

#### (13) 文法化のパラメーター(Heine & Kuteva 2005: 15)

- a. 拡張、すなわち言語表現が新たな文脈で用いられるときに、新しい文法的意味が台頭すること。
- b. 脱意味化(あるいは「意味的漂白」)、すなわち意味内容の喪失(あるいは一般化)。
- c. 脱カテゴリー化、すなわち単語あるいは文法化の程度が低い形式が形態統語的な特徴を消失すること。
- d. 浸食(あるいは「音声的弱化」)、すなわち音声的実体の消失。

また、文法化の前提条件は、ある形式や構文が新たな文脈の中で用いられるようになることであり、その新しい文脈は新しい意味的な解釈を伴いやすいので、新しい文法的な意味の台頭(13a)もまた文法化の前提条件になるという。それに対して、(13b)~(13d)のパラメーターは、(13a)「拡張(extension)」によりもたらされた形態統語的な産物であり、いずれももともとある言語形式が持っていた特質の喪失が関与する。具体的には(13b)「脱意味化(desemanticization)」は意味内容の喪失、(13c)「脱カテゴリー化(decategorialization)」は形態統語的な特徴の喪失、(13d)「浸食(erosion)」は音声的実体の喪失である(Heine & Kuteva 2005: 15)。ただし、ある言語形式が文法化を経験する際に、これらのパラメーター全てが関与するわけではない。

本稿では、Heine & Kuteva (2005)によるパラメーターに加え、文法化にとって重要なメカニズムの一つである「再分析(reanalysis)」も考慮する(Hopper & Traugott 2003: 39)。

### 3.3. 代名詞重複と文法化

すでに2.1.で見たように、代名詞重複は名詞句のトピック性を表すという文脈で用いられるのが本来的である。一方で、性質構文の代名詞重複は、“名詞句の恒常的な性質を表す”というような新たな文脈で用いられるようなものであり、これはまさに文法化の前提条件である「拡張」と見ることができよう。これ以降では、3.2.で述べたパラメーターを用いて性質構文の代名詞重複の文法化の可能性について検討する。

### 3.3.1. 脱意味化

3.1.で述べた性質構文の特徴を踏まえて、まず初めに、「脱意味化」について検討する。イントネーション上の休止によって分節されていないトピックの名詞句は、一文中で同一指示の代名詞と共に起している。このときの代名詞は、代名詞が本来持つ指示的な意味を保持しているだろうか。以下に(5a), (11a)の例を再び引用する。

- (14) a. Кошки – они привыкают к месту. = (5a)  
b. Но отца – его труднее найти, чем мужа. = (11a)

代名詞 они, его はそれぞれ кошки, отца と同一指示である。しかし、代名詞はそれぞれ省略しても文として十分に成立する(15)。

- (15) a. Кошки привыкают к месту.  
b. Но отца труднее найти, чем мужа.

ただしこの場合、(14)と比較したときに、すでに性質構文ではなくなることに関係して、“恒常的な性質”は表されなくなる。

さて、それ以外の代名詞重複ではどうであろうか。まずは(3a), (3c)の例を以下に引用する。

- (16) a. Виктор # я с ним вчера говорила. = (3a)  
b. Она # вообще ее не возможно сдвинуть. = (3c)

ここで、(16a)ним と(16b)の ee は主格標示された Виктор 及び она とそれぞれ同一指示である。このとき、代名詞を取り払うと次のようになる。

- (17) a. \*Виктор # я вчера говорила.  
b. \*Она # вообще не возможно сдвинуть.

いずれも、イントネーション的に隔絶されたトピックの名詞句は分節されている。このとき、残りの文だけを取り出して考えると、それ自体文法的な問題はない。しかし、代名詞を取り払ってしまうと、分節されたトピックの名詞句との統語的なつながりが分からなくなってしまう。ゆえに(17)は非文となる(cf. also McCoy 1998: 245)。したがって、(14)と比較したとき、(16)で代名詞が果たす本来の前方照応的な役割はより大きいと言える。

ゆえに、性質構文における代名詞は、代名詞本来の指示的な意味が、少なくともその他の代名詞重複と比較した場合、一定程度失われていると考えることができる。ここに、重複する代名詞の部分的な「脱意味化」を見ることができ、性質構文における代名詞重複の文法化の一端を見出すことができる。

### 3.3.2. 脱カテゴリー化

性質構文の代名詞重複の形式的なもう一つの特徴は、二重に使用される代名詞が、それと同一指示のトピックの名詞句にほとんど必ず後続する位置を占めるという事である。代名詞の語順を変えることは、文法的には何ら問題はないが、その場合、主語の恒常的な性質を表す特別な意味合いは失われてしまう。

他方で、その他の代名詞重複では、代名詞の現れる位置は必ずしもトピックの名詞句に後続する位置だけではなく、それ以外の位置でも十分に許容される。いわば、この場合の代名詞の語順はかなり自由であると言える。(3a)の例を以下に再掲しよう。

(18) a. Виктор # я с ним вчера говорила. = (3a)

b. Та, которая здесь стояла лампа, # я ее не брал. = (3b)

このとき、代名詞及び代名詞を伴う前置詞句は、トピックの名詞句のすぐ後ろにおかれていない。間にはいずれも主語の人称代名詞が置かれている。しかもこの語順も絶対ではない。実際に、代名詞及び代名詞を伴う前置詞句は、分節されたトピックの名詞句を除いた残りの文の中で他の位置も占めうる。(18a)に対して(19)が、(18b)に対して(20)が可能である。

(19) a. Виктор # я вчера с ним говорила.

b. Виктор # я вчера говорила с ним.

c. Виктор # с ним я вчера говорила.

(20) a. Та, которая здесь стояла лампа, # я не брал ее.

b. Та, которая здесь стояла лампа, # ее я не брал.

この事実が示すのは、重複して用いられる代名詞が統語的に独立した要素であるということである。またこの際、代名詞の語順が変わることで文の情報構造が変わってくることはあるが、文の命題的な意味は変わらない。

一方で、性質構文における代名詞はすでに 3.1. で見たように、トピックの名詞句の後ろという語順でほぼ固まっている。これは、代名詞が本来持っている自立性を統語面で失っていることに起因すると考えられる。ここに見る代名詞の特徴は、互いに独立した要素が融合し、一つの語の語形変化へと発展する形態化(morphologization)の過程の中途の段階にあるものと見ることができる(cf. Hopper & Traugott 2003: 140)。一般的に形態化は次のような連続体を成す。

(21) lexical item > clitic > affix (Hopper & Traugott 2003: 142)

性質構文の代名詞重複において、代名詞がとりうる語順がほとんど固定化しているとい

う事実は、その代名詞が、一般的に語順上で制限を持つようなクリティックの段階にあることを示唆する。ゆえに、性質構文における代名詞は、(21)の連続体中では、接置詞(adposition)的な要素であるクリティックの段階に近づいていると考えられる。Hopper & Traugott (2003: 142)は、独立した語彙的な要素が接辞に発展していく前段階であるクリティック性の直接の証拠は必ずしも見られないが、語順の上での固定化は、その要素がクリティックの段階にあることを示唆する特徴であることを認めている。したがって、このときトピックの名詞の直後という固定化した語順を持つ代名詞は、独立した語彙的な要素としての代名詞というよりは、先行するトピックの名詞句に対する後接辞的な要素に発展する前段階にあるものと言える。両者の間にはっきりとしたポーズが欠如していることもまた、このことを示唆している。イントネーション的に両者が隔離されていないことは、両者の形態的な結びつきの強さを、この代名詞が示す語順と共に示している。このように代名詞が接辞となるという過程は、例えばロシア語では再帰動詞に見出すことができる<sup>10</sup>。現代ロシア語で動詞に対して後接辞化した要素である-сяは、古ロシア語においてはまだ接辞として固まるものではなく、より自由な語順を許容していた。

ゆえに、代名詞がトピックの名詞句に必ず後続して現れるというような固まった語順は、この代名詞が本来の代名詞が持つような統語的な自立性を失い(あるいは失いかげ)、後置詞的なクリティックの要素となっていることを示唆している。このとき、当該の代名詞は、本来持つような形態統語的な特徴が失われており、本来的な代名詞というよりはトピックの名詞との一致を示す文法標識になっているものと見ることができる<sup>11</sup>。よって、ここに性質構文の代名詞の「脱カテゴリー化」の一端を見出すことができる。

### 3.3.3. 再分析

文法化にとって重要なメカニズムとして「再分析(reanalysis)」が挙げられる(Hopper & Traugott 2003: 39)。再分析は、ある構造中の要素の再構成という構成上の変化、及び形態素への異なった意味・統語的なカテゴリーの付与が伴われる(Hopper & Traugott 2003: 51)<sup>12</sup>。

<sup>10</sup> 後接辞の-сяは元来、再帰代名詞の対格形\*sej由来である。古教会スラヴ語(OCS)に先行する共通スラヴ語の時代には、現代ロシア語の себяと同じような価値を持っていたと考えられるが、OCSの時代に入ると動詞と共に用いられ、再帰などの文法的な役割を果たす要素になる。しかし、語順はまだ自由で、動詞の前後のいずれも占めうる要素であり、動詞との間に別の要素が入り込み、動詞と離れた位置を占めることもまれではない。しかし、現代ロシア語に至ると、専ら動詞の後接辞-сяとして用いられ、いわば動詞の後ろで固まってしまう。

<sup>11</sup> トピックの名詞句を指示する二重使用の代名詞が接辞化し、文法化していく現象は様々な言語で知られる。例えば、類型論に基づく分析を行った Givón (1976)などを参照されたい。

<sup>12</sup> 例えば、英語の let us は、本来は[[let][us]]「本動詞+目的語」という構成であったが、[let us]と再分析され、それひとまとまりで「モーダルな助詞」を表すような要素の再構成が行われた。またこれは、let us > let's > lets のような形式上の変化ももたらした。(Hopper & Traugott 2003: 51)

さて、代名詞重複は一般的に次のように分析することができるであろう。

(22) [[Эти люди] [они же на работе]]. = (8)

トピックの名詞句である эти люди は「テーマの主格」としてマークされており、他方で同一指示の代名詞 они のほうは残りの文の主語となっているという解釈である。両者の間にほとんど義務的に現れるはっきりとしたポーズは、この解釈が唯一のものであることを示唆する。

一方で、性質構文における代名詞重複の文は、次の2つの解釈が可能である。

(23) a. [[Жизнь] [она вообще не легкая]]. = (7d)

b. [[Жизнь она] [вообще не легкая]].

(23a)は、(22)と同様に、トピックの名詞句 жизнь が「テーマの主格」としてマークされている解釈であり、このとき代名詞の она は後ろに続く述語に対する主語という役割を果たすものと見ることができる。一方で(23b)は、トピックの名詞句 жизнь が同一指示の代名詞 она と一つのまとまりを成し、本来の主語として再解釈されたものと見ることができる。このように、性質構文の代名詞重複では、(23a)に対する(23b)のような要素の再構成が見いだされる。言い換えれば、構成要素は(23a)のような[[トピックの名詞句] + [残りの文(代名詞)]]から、(23b)のような[[トピックの名詞句+代名詞] + [残りの文]]に再分析されたものと見ることができる。

ただし、(23b)でみられるような構成要素の再分析は、形式上ではまだ十分に見出すことができない。例えば、代名詞の接辞化のような事態はまだ起こっているとは言えないし、代名詞のクリティック化も形式上は見取することはできない。しかし、3.1.において指摘した、トピックの名詞句と代名詞の間におけるはっきりとしたポーズの欠如と語順の固定化という2つの特徴は、構成要素の再分析が形式面においても部分的に現れてきているものと見ることができる。意味上の再分析と形式上の再分析は必ずしも歩調を合わせるものではなく、意味上での再分析が進んでいても、形式面ではそれが必ずしも明示的に表されないこともある(cf. 野町 2011: 36, Hopper & Traugott 2003: 39)。したがって、(23b)は、意味上での再分析は進んでいる一方で、形式上での再分析がなされ、それが固定化する段階にはまだ至っていないような段階にあるものと言える。

#### 4. まとめ

本稿では、ロシア語における代名詞重複の中でも、性質構文の代名詞重複の形態統語的な特徴を踏まえ、性質構文の文法化の可能性について、Heine & Kuteva (2005)の文法化のパラメーターなどを用いて検討を行った。その結果、次のことが明らかになった。

まず、性質構文の代名詞重複は、名詞句の恒常的な性質を表すというような新たな文脈

で用いられるが、この点において文法化のパラメーターの1つである「拡張」を見ることが出来る。また、性質構文の代名詞は、本来持つ指示的な意味が一定程度失われている点で「脱意味化」の傾向がみられる。また、代名詞が示す固定化した語順は、それが本来持つ統語的な自立性を失いかけていることを示唆し、他方、トピックの名詞句と代名詞との間にははっきりとしたイントネーション上のポーズが置かれえないということは、形式面における両者間の結びつきを示唆する。これらのことは、独立した要素である代名詞が、後置詞のようなクリティックの要素に至り、最終的には先行するトピックの名詞句の後接辞に発展していくというプロセスの中途の段階にあるものと見ることが出来る。代名詞が本来持つ形態統語的な特徴が失われ、トピックの名詞句との一致を示す単なる文法標識に発展していることを示しており、ここに「脱カテゴリー化」の傾向を見いだすことができる。さらに、性質構文における代名詞重複の文は、2通りの解釈が可能である。すなわち、文頭で重複を受ける名詞句がトピックの名詞句として、代名詞が残りの文中の動詞の項として解釈されるものと、元来トピックである名詞句が、後続する同一指示の代名詞とともにひとまとまりとして、残りの文中の動詞の項として再解釈されるものである。2通りの解釈が可能である性質構文における代名詞重複の文は、少なくとも意味の面で「再分析」が進んだものと考えられる。

ゆえに、性質構文の代名詞重複は、少なくともその他の代名詞重複と比べて、文法化が進んでいるものと見ることが出来る。ただし、あくまでも比較の中での程度問題であり、性質構文の代名詞重複が完全な文法化の段階にあるとは言えない。

最後に、今後の課題を述べる。

まず、文法化が進んでいることを示す証拠を、今回取り上げたもの以外でも集め、本稿の主張を補強していくことが何よりも重要であろう。特に、文法化のパラメーターの中で、浸食に関しては、本稿が音声を対象としなかったので検討外とし、取り扱わなかった。この点についての検討も今後行っていきたい。ただし、代名詞が浸食を示唆する段階にあること（すなわち代名詞がクリティック的な段階にあること）は3.3.2.で指摘した。

また、再分析が形式の点で明示的には見られないので、別の視点から意味的な再分析がどの程度進んでいるかについて検討すべきであろう。たとえば、代名詞重複が本来的にはトピック化とかかわりが深いという事実を踏まえて、文頭で重複を受ける名詞句のトピック性の度合いを性質構文の場合に検討し、意味的な再分析がどの程度進行しているかを検証したい。

さらに、同じく代名詞重複を持ち、しかも文法化がかなりの程度進んでいることが知られるブルガリア語などバルカン諸語との比較を通して、ロシア語の代名詞重複の形態統語的な特徴や文法化の程度について詳細に検討したい。

様々なコーパスを用いて、より多くの例を集めることが必要であることは、特に重要な今後の課題である。

## 参考文献

- Крылова, О. А. (2013) *Коммуникативный синтаксис русского языка. Изд. 3-е.* Москва: URSS.
- Крылова, О. А. & Хавроница, С. А. (1984) *Порядок слов в русском языке.* Москва: Русский язык.
- Лаптева, О. А. (1966) О некодифицированных сферах современного русского литературного языка. *Вопросы языкознания*, № 2, 40-55.
- \_\_\_\_\_ (1976) *Русский разговорный синтаксис.* Москва: Наука.
- Панова, М. В. (1968) *Русский язык и советское общество: Морфология и синтаксис современного русского литературного языка.* Москва: Наука.
- Попов, А. С. (1964) Именительный темы и другие сегментированные конструкции в современном русском языке. *Развитие грамматики и лексики современного русского языка*, 256-274. Москва: Наука.
- Сиротинина, О. Б. (1974) Конструкции с плеонастическим местоимением в разговорной речи. *Синтаксис и норма*, 204-219. Москва: Наука.
- \_\_\_\_\_ (2010) *Всё, что нужно знать о русской речи: Пособие для эффективного общения. Изд. 2-е, перераб. и доп.* Москва: URSS.
- Comrie, B. (1973) Clause Structure and Movement Constraints in Russian. *You take the high node and I'll take the low node. Papers from the Comparative Syntax Festival. The Differences between Main and Subordinate Clauses. 12 April 1973*, 291-304.
- Gebert, L. (2009) Information structure in Slavic languages. *Information Structure and its Interfaces. Interface Explorations 19*, 307-324.
- Givón, T. (1976) Topic, pronoun and grammatical agreement. *Subject and topic*, 149-188.
- \_\_\_\_\_ (2001) *Syntax. An Introduction. Volume II.* Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Heine, B. & Kuteva, T. (2005) *Language Contact and Grammatical Change.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Hopper, P. J. & Traugott, E. C. (2003) *Grammaticalization. Second Edition.* Cambridge: Cambridge University Press.
- McCoy, S. (1998) Individual-Level Predicates and Pronoun Doubling in Colloquial Russian. *Annual Workshop on Formal Approaches to Slavic Linguistics. The Connecticut Meeting 1997*, 231-251.
- \_\_\_\_\_ (2003) Pronoun Doubling and Quantification in Colloquial Russian. *Journal of Slavic Linguistics 11(1)*, 141-159.
- SRC (2010) 『ロシア語話しことばコーパス 2008年度/2010年度』, 東京外国語大学大学院

グローバルCOE「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」.

菅井健太 (2014)「ロシア語における『代名詞重複』について」『ロシア語研究』23, 43-63.

野町素己 (2011)「スロヴェニア語の構文「dobiti+受動過去分詞」について—文法化の観点からの分析と試論—」『西スラヴ学論集』14, 30-51.

匹田剛 (1993)「ロシア語における2つの統語的トピックについて」『小樽商科大学人文研究』86, 139-166.

## **Несколько замечаний о местоименном удвоении в «качественной конструкции» в русском языке (в рамках теории грамматикализации)**

СУГАИ Кэнта

Данная статья посвящена анализу т. н. «местоименного удвоения» в русском языке. Мы называем «местоименным удвоением» двойное обозначение подлежащего или дополнения с помощью личного местоимения. Цель этой статьи заключается в том, чтобы проанализировать данное явление в рамках теории грамматикализации.

Местоименное удвоение чаще всего наблюдается при выдвижении именительного темы в начало предложения или высказывания. При этом именительный темы, имеющий местоименный коррелят в следующем за ним предложении, резко выделен интонационно. Сиротинина (1974, 2010), однако, выделяет «качественную конструкцию», в которой тоже наблюдается местоименное удвоение. Она отмечает, что данная конструкция имеет интонацию обычного повествовательного предложения, при этом местоимение объединяется в один речевой такт со сказуемым; понижения тона, значительной паузы перед местоимением нет. Она также отмечает, что в качественной конструкции удвоенное местоимение создает особое значение постоянного присущего предмету признака, качества, и вовсе не является лишним и ошибочным.

Основываясь на морфосинтаксических признаках, автор данной статьи утверждает, что местоименное удвоение в качественной конструкции является более грамматикализированным видом удвоения. Для анализа использовались некоторые параметры грамматикализации, предложенные в работе Хайне и Кутева (2005). В результате анализа выяснилось следующее: удвоенное местоимение

1) создает особое значение постоянного качества, что предполагает распространение употребления данного явления в новом контексте;

2) испытывает частичную утрату референциального значения присущего местоимению;

3) испытывает частичную утрату морфосинтаксического признака, присущего местоимению;

4) вместе с предшествующим ему именительным темы можно реанализировать его как одну единицу, по крайней мере на семантическом уровне.

Признаки удвоенного местоимения, наблюдаемые здесь, предполагают, что местоименное удвоение в качественной конструкции находится в процессе

грамматикализации, хотя еще в его начальной стадии.

В заключение автор пришел к следующему выводу: местоименное удвоение в качественной конструкции находится в более грамматикализованной стадии по сравнению с другим местоименным удвоением, включающим в себя именительный темы.